



もう一つは不登校を考えるとときである。外国にルーツがある子どもたちが目の前に支援が必要な存在として意識せざるを得ない状況で存在しているのに対して、不登校の子どもたちはまさしく姿と気配を消し、担任の意識に上ることがないように振る舞っているともいえる。一人一人の要因はいろいろあったとしても、「競争から降りた」という表明は共通である。日々の授業を進める中で、授業者が不登校の子どもを意識することはあまりないだろう。なぜなら、教室は「競争に参加するもの」のために開かれ、授業は「競争」の具体的場面そのものだからだ。だから、競争者のいない家庭での学習は授業とは認められないし、学校での学習内容を子どもが決めることはできない。

当然、不登校の子どもたちへも「競争への参加」が促され、学校へおいで、試験や行事だけは参加しないか・・・などの誘いがある。

こうした流れに近年では違う流れが出てきた。「学校に来なくても良い」というのだ。フリースクールや、ひょっとしたら家庭で計画的に学習していたら、それも学校に来たことにしようというのだ。ずいぶんと変わったものだ。不登校に引け目を感じていた子どもたちや保護者には良い知らせなのかもしれない。しかし、変だなという疑問もわき起こる。

競争から降りた子どもたちが、学校に来ないで勉強していたらそれも単位と認めようというのだが、あくまでも学校の外のことである。こうした考えでは学校は全く変わることはないし、そのあり方になんら影響を受けることはない。学校と学校以外という二本の線を引き直したとしても、そこにどんな意味があるのだろうか。あくまでも「競争をおりた者」として、改めて認定し直したただけのことではないか。本当に大切なことは、学校の中がいくつかの可能性を含みこみ、様々な子どもが「私は私」という存在の揺るぎなさを示す笑顔とともに「教室」があることを目指すべきであるということだ。学校と学校以外という棲み分けは、実は排除の論理につながる可能性さえあることに注意しなければならないように思うのだ。

ヤングケアラーの課題に触れるとき、私たちは二つのことを念頭に置かなければならない。

一つは、一人一人への支援の意味はそれぞれきっと違うはずであり、少なくとも、無意識に子どもを「競争の場へ引き戻すため」にならないようにすること。

そしてもう一つは、教育か福祉か、といった二項対立の考え方をしないこと。二項対立の考え方には、常に排除の論理の危険性がつきまとうことを忘れてはいけないからだ。

2月24日の教育講演会には是非多くの方にご参加いただき、ともに考えたいと思う。

### 3月のEd.ベンチャーの学習会

これまでの学習会の詳細HPで！

#### ◆外国人の子ども理解の学習会

2月29日(土)13:30~15:30 シリウス607 事例研究会

○実際の事例をもとに、教師・学校の対応を具体的検討します。

3月27日(金)15:30~17:30 シリウス612 「ビザ/在留資格を知る」

講師:清水睦美氏(日本女子大学 教授)

○国境を越える移動を理解する際の基礎基本です。外国人の日本への移動経緯や今後の滞在のゆくえを知ることができます。

#### ◆インクルーシブな社会を目指す学習会

○3年間の「特別支援教育のための学習会」を経て、ブラッシュアップした学習会を目指して、2020年より名称が変更されます。

3月27日(金)17:30~19:30 シリウス 卒論報告「小学校現場で障がい児が被る差別・偏見」

発表者:横山青空さん(日本女子大学教育学科4年)

○小学校でのフィールドワークをもとに、特別支援学級の子どもが交流級との関わりの中で、どのような処遇をうけるのか。そこにはマジョリティ側のどのような理解があるのかを明らかにしています。

【理事のつぶやき】「嘘をつかない。」「人を傷つけない。」「自分が間違ったら素直に謝る。」みんな教わってきたし、子どもたちにも伝えていること。しかし、今それができない大人たちの姿がニュースに取り上げられている。そんな人たちが動かしているこの国は、どうなってしまうのか。もう一つ心配なのは、そんな大人は子どもたちの目にどう映っているのか。おかしいことがまかり通せてしまう、そんな大人にはなってほしくない。(IT)